

◇倭国と天竺のかかわり

トインビーは、世界の文明は宗教を母体にして生まれ育ち、時には運命も共にしたとする考えの下で、これまでの文明を十三種に分類し、日本の文化は中国の文明圏に属すると見てきた。

これは大雑把には当たっているが、日本文化の根底には天竺由来のものが混在するの事実だ。我が国では縄文時代の昔から、五帝期の神仙思想、天竺風の習慣・来世観・石の文化、それに仏教と似る教義が根づいていた。このことから、「東の海上に神仙郷がある」との噂が何度も中国に伝わり、斉の威王・宣王、燕の昭王らが東海上に探検隊を送り出すのであり、儒教を弾圧した秦始皇帝も神仙思想に心を開いて、不死不老の仙薬を手にしようと徐福を遣わした。

邪馬台国時代には、この種の神仙観が鏡の模様となって現れた。神仙の人物画像が铸込まれたホケノ山古墳（奈良県、三世紀中葉）の画文帯神獸鏡、仏の光背と似る円形模様が神像背後に描かれた樺井大塚山古墳（京都府、三世紀末）の三角縁神獸鏡がそうだ。四世紀前半になると、それが仏教色を一段と濃くして行く。蓮華座に座って両手に印を結ぶ仏の姿が新山古墳（奈良県）出土の三角縁仏獸鏡に現れるのだ。

☆ここで、仏教が漢に伝わった経緯についておさらいしておこう。

前三世紀、マガダ国王として立ったアショーカ王は、仏陀の遺骨を納めた八つの仏塔のうち、七つを開いて遺骨を細かく砕き、それを八万四千の仏塔に納めて布教に努めた。

滋賀県の石塔寺は、その一つとされる。

☆光武帝の次に立った明帝（五七〇七五年の治世）は、六五年に仏教をたずね求めて、天竺に使者を派遣した。この使者は二年後に仏典と仏僧をともなって帰国した。



太陽神スールヤ

『後漢書』「西域伝」、「明帝、夢に金人を見る。長大にして頂に光明あり。以つて群臣に問う。ある人曰う。西方に神あり、名づけて仏と曰う。その形、長さ丈六尺にして黄金色なりと。帝、これに於て使いを天竺に遣わして仏道の法を問う」

☆クシヤン朝のカニシカ王（一二〇〜一五六年の治世）は、西インド・パキスタン・アフガニスタンにわたる大帝国を築くと、仏典の編纂を命じたり、各地に仏塔を建てするなどして仏教の布教に努めた。中心都市のガンダーラでは、ギリシヤ文化と仏教文化が結合して仏像が作られ、仏教美術が花咲いていた。そこでギリシヤの影響も受ける仏教は、ペルシヤ・中央アジア・東南アジアへと広がった。

☆漢桓帝の在位中（一四六〜一六七年）に、パルティア国の安世高が、ついで月氏国のシルカセンが洛陽にやつて来て仏教を伝えた。互いが仏典や経典を競つて漢訳したことで、洛陽を中心に中国風の仏教が広まった。

これ以外にも、竺仏朔・安玄・支曜・康猛詳・曇果が漢訳にたずさわつてきた。竺姓はインド人、安姓はペルシヤ人、支姓は月氏、康姓はサマルカンドの人、曇は梵語ダルマの法の音からとつた漢字でインド僧を意味した。いずれもクシヤン朝に縁ある西域の人たちとされる。桓帝自身も黄老思想とあわせて仏教を敬つたという。

☆この仏教の広がりとともに信徒の組織化が進み、修業場や寺が次々と建てられた。これに刺激されて、不老不死を唱える神仙の徒までが組織化に走り、各地で教団を立ち上げた。それが道教と呼ばれた。河北で起こる太平道も蜀で広まる五斗米教も、その一派だった。

☆この頃の仏典には、「仏国に入るあらゆる生き物は、金色一色からなる」という教えがあつて、仏と化するものは金色で表現されもした。記紀や伝承に、金色の光、金色の瑯とびなどの逸話

が多々出てくるが、これと仏教とは無縁ではない。ちなみに、道教では黄色、神仙思想では白色で表されるのが通例だ。

☆仏教が中国に伝わったのは、後漢の明帝期（六七年）だが、本格的に発展するのは、桓帝期（一四六～一六七年）にパルティア国の安世高や月氏国のシルカセンが渡来してからだ。

☆その二十年後、大乱が勃発して邪馬台国が興り、そのまた数十年後の二二〇年代前半に女王ヒミコが君臨したのである。

☆クシャン朝は後漢に使者を送ったが、三世紀中に衰退した。アンドラ王国も二二〇～二五〇年に内部分裂して亡びた。

当時、倭国と天竺の往来は無かったと思われがちだが、わが国の文化・伝統・伝承の中に、クシャン朝、マガダ国、アンドラ朝に由来するものが江南經由で伝来して、深く根を張っている。本書は、その時期が伊奘諾期に始まるとし、その頃にマガダ国王が倭に渡来して常世づくりや仏教を持ち込むと睨んでいる。現に、マガダ国王にまつわる有名な逸話が『神道集』に熊野権現事として記されている。熊野でも、天台山（紹興南東に聳える山）の山王となった王子信が神武天皇御代に熊野権現となって現れたとする伝説が熊野権現垂迹縁起として伝わっている。

以来、磐座崇拜、支配者が天空を駆けめぐるとする話、黄金色で飾られる話、日と月の神となって結ばれる話、さらに仏塔に似た円墳や石葺き古墳がにわかに盛んになる。列挙してみよう。

①天界に住む日神が月神・火神を率いて空界・大地の神々を支配する話、支配者が天空を駆けめぐるとする話や黄金色で飾られる話

【バラモン神の教え】、「天界、空界、大地にはそれぞれの神がいる。天界の日神（男神）は、生まれながらに空界と大地の神々を支配し、衆生の行動を絶えず見守っている。日神の一日は多忙だ。

夜が明けると、若い女神と共に黄金の七頭立て馬車に乗って天空を駆けめぐり、人々を起こしては仕事に就かせ、夕べになると眠りに誘い、死者があればその靈魂を天に引き上げる。月神は日神に対して、陰と陽、あるいは月と日の関係のごとく寄り添って仕える。

火神は空界にあつて、神々の中で最も賢い神であり、太陽・雷光・火などを使つて宗教儀式を行う。風神と雷神は空中を駆けめぐつて飛び戦う一方、季節に応じて風を吹かせたり、大地に恵みの雨を降らせたりする。時には、ヒマラヤ山に雷鳴を轟かせもする」

『日本書紀』、「ここに日の神を生みまつります。大日靈貴と号す。次に月の神を生みまつります。月詭命つぐよみという。次に素戔鳴尊を生みまつります。次に火神軻遇突智を生む」、「(経津主と武甕槌)、天に昇りて復命を告して曰さく、『葦原中つ国は、皆已に平けおえぬ』」、「神武紀」、「饒速日命、天磐船に乗りて、太虚おおぞらを翔行めぐりゆきて、是の郷くにを睨りて天降りたまうに及至りて、故、因りて目けて、『虚空そら見つ日本の国』と曰う」

② 日の神と月の神の結婚

古聖典は支配者のあるべき姿について、月の神・ソーマと太陽神(日の神)の娘・スールヤが結婚して、苦難の道を生き抜いた人生を模範例に取り上げ、大いに賛美してきた。

「伊奘諾紀」、「ここに、陰陽(月日の神、伊奘冉と伊奘諾)始めて遵合して夫婦と為る」

☆本書では、大日靈貴(日神の天照大御神、向津姫)は、月詭命(熊野櫛御氣野、豊受皇太神、天照大神、高皇産靈)を婿養子に迎えて、永久の夫婦縁を結んだと見ている。その証拠に、二人は皇天二神と仰がれ、共に伊勢大神として祭られてきた。

③ スメラ (シユメール) 山とスメラミコト

インドのどの種族もヒヤラヤ山をスメラ (シユメール) 山の名で親しみ、神の山として崇めてきた。この名はシユメール系のドラヴィダ人が神山として崇めたことに始まる。

④ 甕棺・支石墓・環状列石・石の男根

新石器時代からインド大陸に住むドラヴィダ人たちは、皮膚の赤い、髪の波打つ種族だった。彼らは仲間が死ぬと、甕棺に埋葬したり支石を置いたり、巨石を立てるなどして吊ってきた。

☆支石墓、環状列石、石の男根は、縄文・弥生期の遺跡からも多々出てくる。

☆糸島平野には、志登支石墓群を初め、支石墓が密集して残る。

⑤ 仏塔と円墳、石葺き古墳・神社の鳥居や玉垣

アショーク王は、仏陀の遺骨を納めた八つの仏塔のうち、七つを開いて遺骨を細かく砕き、八万四千の仏塔に納めて布教に努めた。

サーンチーやバールフトには、石やレンガで表面を覆った紀元前の仏塔や石の鳥居・玉垣が、当時の姿のままに残る。

【仏陀の言葉】、「仏塔が悟りを開いた仏陀や弟子らの塔だと思うと、多くの人々は心が清められる。それはまた、最後に善い世界を約束されたものだから、仏塔の礼拝をすすめる」

☆滋賀県の石塔寺は、八万四千の一つとされる。

☆葺き石古墳、神社の鳥居・玉垣の形は、サーンチーンに残る仏塔と酷似している。

⑥ 熊野権現



サーンチーンの仏塔

天竺のマガダ国王と熊野権現・伊弉諾にまつわる逸話が熊野権現事として、『神道集』に記されている。これについては、詳しく後述するつもりだ。

⑦ 仏教と素戔嗚

梵語では牝牛をゴーと言ひ、やまと言葉では頭をアタマと発音するから、牛頭天王の名は仏陀・ゴータマと呼ぶに等しい。

☆京都の祇園社（八坂神社）は、素戔嗚を牛頭天王として祀る。

☆天王社、広峯神社、八雲神社、須賀神社、素戔嗚神社も、祇園信仰の下で牛頭天王を祀る。

⑧ 嵐の神と素戔嗚

嵐の神・シバ神は、雄牛と石のリングで象徴される非アーリア系の神だが、仏教に取り込まれても仏陀に仕える守護神に納まった。

☆素戔嗚も、嵐の神とされてきた。

⑨ 天孫降臨

ドラヴィダ人の国は、王が母方の名を継ぐことから日本の漁民と同じく母系社会だったとされる。その子孫たちは今も、「天上の神々は、妻子や随伴者を伴って地上に降臨し、人々と共に暮らす」という神々降臨の信仰を伝える。

『日本書紀』、「皇孫、天磐座を離ち、日向の襲の高千穂峰に天降ります」

⑩ 国語学者の大野晋博士は、この地方で今も使われるドラヴィダ語系のタミル語が日本語の文法と酷似して、単語も同じ語源のものが多くと主張してきた。

⑪ ヒンドウ教のヒンドウという語は、インダス河またはインドの河を意味するペルシャ語だが、アーリア系古語のサンスクリット語では、これをシンドウと発音した。すると、神道の発音も根本理念も、天竺に由来するかも知れない。